

令和 2 年 7 月 10 日現在

機関番号：11201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02068

研究課題名（和文）女性の震災記録活動がもつ新しい社会創造に果たす役割と可能性についての実証的研究

研究課題名（英文）Empirical Study on Potentials of Womens Disaster Documentation Activities towards Creation of New Societies

研究代表者

堀 久美 (HORI, Kumi)

岩手大学・男女共同参画推進室・准教授

研究者番号：30714860

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：女性が残した災害記録と女性たちの記録活動等を調査・分析し、これらの記録が女性の災害経験を可視化し、個人的な経験の背景にある社会的な課題を浮かび上がらせたこと、記録活動を通じた自身の経験や思いの表現が、女性のエンパワーメントとなること、男女共同参画関連施設の情報機能が、女性の自発的な記録活動に基づく災害対応を促進することを明らかにした。以上のことから、記録活動が新しい社会創造の可能性をもつことが実証された。さらに、言語化や記述の困難な女性の経験を記録するために活用された表現手法が、公的領域で「声」をあげることが困難であった女性の「言説の資源」となり得ることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

記録活動を、活動に携わった女性の立場から検証することで、災害対応や政策への活用という意義はもちろん、被災した女性へのエンパワーメント支援という新たな意義を指摘したことや、ジェンダー視点の乏しかった情報研究において、男女共同参画関連施設の情報機能のもつ専門性を実証した点に学術的意義がある。また、調査協力いただいた関連施設において、本研究の成果報告書が、コロナ禍対応の検討資料とされる等の波及効果や、岩手県がとりまとめた「東日本大震災津波からの復興 岩手からの提言」への寄稿等の社会的意義を発揮した。

研究成果の概要（英文）：This research studied and analyzed documentation by women and their documentation activities and has revealed that: 1) these documentation has visibilized women's experiences in disaster and highlighted societal challenges behind individual experiences; 2) sharing and expressing individual experiences and thoughts through documentation activities lead to women's empowerment; and 3) information function that gender equality centers have promotes disaster responses based on voluntary documentation activities by women. Thus, it is proven that documentation activities have potentials towards creation of new societies. Furthermore, this research suggests that the methods of expression used to document women's experiences that are hard to be verbalized or described can be 'resources of discourse' for women who have found it hard to raise her 'voice' in a public sphere.

研究分野：ジェンダー研究

キーワード：震災記録 ジェンダー 女性 情報 自発的活動 男女共同参画関連施設

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 「災害とジェンダー」に関する研究においては、自然災害の影響にジェンダーによる差異があることはすでに明らかになっていたが、日本における公的な対応は遅れており、政策等では対応しきれなかった課題や困難に対する不足を女性の活動が補った。しかし、被災した当事者女性や支援活動に携わる女性の立場からの研究は乏しく、女性のニーズを防災・政策や復興のまちづくりに活かす道筋を示す体系的な研究成果はみられなかった。

研究代表者の堀は、既に「震災復興」をめざして自発的活動を行う女性たちへのインタビュー調査等を行い、女性の活動がジェンダー視点からの「震災復興」を実現し、復興後の新しい社会を創造する可能性をもつという知見を得ていた。

(2) 2000年代に入る頃から「新しい公共」に対する政策的関心が高まり、公共論が活性化している。震災復興においても、「新しい公共」の拡大と定着が期待され、女性が活動の大きな部分を担っている。しかし、公共的議論の場においては、「言説の資源」の優劣が文化的・政治的な他者への指導力を左右する（斎藤 2000）ため、これまで私的領域に位置づけられてきた女性は劣位におかれ、女性のニーズを公的議題とすることは依然困難であり、「できる限り男性と同じようにふるまう限りにおいて、ようやくその姿をみられ、その声を聞かれることができるにすぎない」（オーキン 2013）という課題を解決する方策は明らかとなっていない。

研究代表者の堀による、中越大震災の記録とその後の防災政策立案の状況の検討から、女性の震災記録活動がジェンダー視点からの復興を達成する可能性が示唆されていた。

(3) 情報研究では、防災・復興に資する記録を残すことの重要性が明らかにされていたが、ジェンダー視点からの検討は乏しかった。また、国立国会図書館や被災地の図書館においても、様々な形態の資料の電子アーカイブ化にも精力的に取り組み、その意義は評価を得ていた。しかし、これらの先行研究においては、ジェンダー視点からの検討は乏しく、研究分担者の木下が様々な立場の女性たちの活動記録の目的等の検討から、今後の防災政策への活用の可能性に言及したに過ぎなかった。

### 2. 研究の目的

近年の女性の社会参画促進の動きは女性の自発的活動を活性化させ、女性による情報発信を増加させた。そして、こうして発信された情報が女性の自発的活動に活用されるという、情報と活動の循環が生じている。本研究は、阪神・淡路大震災、中越大震災、東日本大震災、さらに熊本地震へと研究対象となる震災記録を時間的・空間的に拡張し、女性の震災記録及び記録活動を調査・分析することを通じ、①ジェンダー視点からの防災・復興における女性の震災記録の果たす意義、および②情報と活動が循環する女性の自発的活動が政策を動かし、新しい社会創造に果たす役割と可能性を学際的に実証することを目的とする。

さらに、これまで私的領域に位置づけられ、公的領域で「声」をあげることが困難であった女性による近代的公私二元論の脱構築・再構築に向けて、記録活動がもつ可能性についての考察を深めることも目的とする。

### 3. 研究の方法

#### (1) 資料収集・検討

阪神・淡路大震災以降の震災や地震、豪雨災害等について、女性たちが残した記録誌の収集・分析を行い、女性たちが残しなかった経験、ジェンダーの視点がどのようなものであったかを検討した。

#### (2) 震災記録活動を行う女性団体と活動する女性への調査の実施と調査結果の分析

活動の実態や意識を明らかにするため、インタビューや参与観察による質的調査を行い、社会への働きかけや記録活動を通じた女性たちへの支援の成果、意思決定過程への参加の状況、防災・復興政策への反映状況等の観点から分析した。

#### (3) 男女共同参画センター情報ライブラリー／図書室への調査の実施と調査結果の分析

被災地周辺の男女共同参画センターを対象に、女性たちの記録収集・提供についての実態や意識を明らかにするため、インタビューによる質的調査や質問紙による調査を行い、男女共同参画センターが果たすべき図書館機能の観点から分析した。

#### (4) 研究成果の公表

上記の検討・分析結果に基づく考察を行い、その内容を論文として公表した。また、学会でのパネル報告や研究報告会の主催、成果報告書の発行等を通じ、調査協力者を含む関係者との情報意見交換を行い、震災記録が新しい社会を創造する道筋等について検討を深めた。

#### 4. 研究成果

##### (1) 記録誌の収集・検討を通じた研究成果①

女性団体等の活動によって発行された記録誌は、自主的な取組であり、「灰色文献」と呼ばれる、一般の出版流通ルートを通さない発行物が多く含まれていることに着目し、資料収集・検討を行った。その結果、1) 女性の災害経験を可視化し、活かしていくには、自らの手で記録誌を発行しなければならない、という共通する動機が、多くの灰色文献を生み出したこと、2) 女性の個人的な経験の背景に社会的な課題があるとの思いが、さまざまな立場にある女性の経験を記録に残してきたことを明らかにした。

##### (2) 記録誌の収集・検討を通じた研究成果②

この間に収集した女性の震災経験を記録した灰色文献(1965年～2019年発行)は95誌に及ぶが、国立女性教育会館女性教育情報センターや国立国会図書館、大学図書館、公共図書館等に所蔵がない資料も少なくない。これらの資料について、とくに埋もれがちであった阪神・淡路大震災後の資料を紹介したり、研究成果報告書において、収集した灰色文献の資料名、作成・発行者、発行年月、内容分類、所蔵先等の一覧表を掲載して、資料の可視化を図った。

##### (3) 震災記録活動を行う女性団体と活動する女性への調査・分析①

震災記録活動のうち、アンケートや聞き取りという手法に着目して、調査・分析を行った。その結果、1) これらの手法が、自身の経験や思いを言語化することが難しく、声なき声となってしまうがちな、女性の災害経験を可視化する意義をもつこと、2) そしてそれが、次の取組に活かすという目的を超え、災害を経験した女性の自己表現を通じたエンパワーメント支援の意義ももっていたことを明らかにした。

##### (4) 震災記録活動を行う女性団体と活動する女性への調査・分析②

震災記録活動のうち、言語化されない媒体による記録の手法として手仕事に着目して、調査・分析を行った。その結果、1) 手仕事の制作活動が、言語化が難しい多様な立場の女性の経験や思いを表現する機会となったこと、2) その作品が、声なき声となりがちな、女性たちの経験や思いの記録としての意義ももっていたこと、3) 手仕事の展示が経験の言語化のきっかけとなる例があること、そして、4) 手仕事の取組を支援する活動が、被災地の女性の心を癒し、自らの経験の意義に気付くエンパワーメント支援の役割を果たしたことを明らかにした。

##### (5) 震災記録活動を行う女性団体と活動する女性への調査・分析③

震災記録活動のうち、セクシュアルマイノリティの経験を記録に残した活動に着目して、調査・分析を行った。その結果、1) 東日本大震災までは潜在化していたマイノリティの困難が公的な課題として認識されるなかで、その記録が求められたこと、2) 記録に基づき作成したガイドブックが、防災計画作成時等に活用されたことが明らかとなり、記録がマイノリティの困難を可視化し、その後の災害対応や防災政策に活用されるモデルが提示できた。

##### (6) 男女共同参画センター情報ライブラリー／図書室への調査・分析①

災害時の男女共同参画センターが担った役割を情報機能に焦点を当てて、調査・分析を行った。アンケート調査の結果から、1) 回答した男女共同参画センターの6割以上が、「図書室等での関連資料展示」を実施する等、多くの男女共同参画センターが災害についての情報発信を行っていること、そして、2) センター相互の連携・協力体制が、災害時に有効に機能する可能性が高いことを明らかにした。また具体的な事例に基づく考察から、3) 日ごろから男女共同参画に関する情報提供、女性グループ・団体の自主的活動の場の提供、相談事業、調査研究、講座やセミナーの実施等、多様な機能を有している男女共同参画センターによるジェンダー視点での情報発信が有効であることを明らかにした。

##### (7) 男女共同参画センター情報ライブラリー／図書室への調査・分析②

阪神・淡路大震災の被災地にあるセンターに焦点を当て、調査・分析を行った。その結果、1) センターにおける情報収集・組織化・情報提供や発信が、災害時に力を発揮することだけでなく、2) 長期的には、震災の経験を活かすための取組や女性たちの情報活動への支援、及び支援活動への情報面からの支援に成果をあげること、3) センターによる災害時の資料の収集・保存と組織化が、次に震災が起きた時に必要な情報の提供に有効であること、4) 被災地についての継続的な情報発信が、風化を抑止し、被災者支援となること、5) センターで情報を得た女性たちの活動成果が資料として収集され、センターからの情報として発信されるという活動と情報の循環が生じることを明らかにした。

(8) 近代的公私二元論の脱構築・再構築の可能性についての考察

これまで私的領域に位置づけられてきた女性は、公的議論の場で必要とされる「言説の資源」において劣っており、女性のニーズを議題にすることが困難であった。災害経験の記録化が、声なき声となりがちな女性やマイノリティの経験を可視化する手法となり得ることを明らかにした。また、女性の経験と経験が社会的に表現される形態との間の分裂も指摘されてきているが、手仕事による表現は、このようにこれまでの表現では分裂があるとされてきた女性の経験を社会的に表現する手がかりになり得る可能性が示唆されたことで、女性の経験を個人的なこととして私的領域に位置づけてきた公私二元論の脱構築・再構築についての考察が進んだ。

(9) 以上、災害に関する記録活動を、活動に携わった女性の立場から検証することで、災害対応や政策への活用という記録のもつ役割や、被災した女性へのエンパワーメント支援という記録活動のもつ新たな役割が明らかとなった。また、女性たちへの活動の場の提供等、多様な機能を有する男女共同参画センターの災害についての情報機能についても明らかとなった。これらことから、女性の震災記録活動がもつ新しい社会創造に果たす役割と可能性についての実証が進んだ。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>堀 久美   | 4. 巻<br>34          |
| 2. 論文標題<br>災害に関する女性センターの情報機能についての一考察 兵庫県立女性センター・イーブンの長期的な取組を事例として  | 5. 発行年<br>2018年     |
| 3. 雑誌名<br>現代行動科学会誌   | 6. 最初と最後の頁<br>1-11  |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br><a href="http://doi.org/10.15113/00014823">http://doi.org/10.15113/00014823</a> | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）  | 国際共著<br>-           |
| 1. 著者名<br>木下みゆき  | 4. 巻<br>53          |
| 2. 論文標題<br>災害時における男女共同参画センターの情報機能に関する一考察：阪神・淡路大震災から熊本地震までの連携・協力を中心に  | 5. 発行年<br>2019年     |
| 3. 雑誌名<br>大阪大谷大学紀要   | 6. 最初と最後の頁<br>45-61 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし  | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）  | 国際共著<br>-           |
| 1. 著者名<br>堀 久美   | 4. 巻<br>35          |
| 2. 論文標題<br>女性の災害経験を記録する活動の意義 アンケートや聞き取りによる記録活動を中心に   | 5. 発行年<br>2019年     |
| 3. 雑誌名<br>現代行動科学会誌   | 6. 最初と最後の頁<br>1-10  |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br><a href="http://doi.org/10.15113/00014844">http://doi.org/10.15113/00014844</a> | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）  | 国際共著<br>-           |
| 1. 著者名<br>堀 久美   | 4. 巻<br>5           |
| 2. 論文標題<br>資料：災害の経験に関する女性たちの記録 埋もれてしまった阪神・淡路大震災後の発信から  | 5. 発行年<br>2020年     |
| 3. 雑誌名<br>ポリモルフィア  | 6. 最初と最後の頁<br>74-80 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし  | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）  | 国際共著<br>-           |

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

|                                  |
|----------------------------------|
| 1. 発表者名<br>堀 久美                  |
| 2. 発表標題<br>女性の災害経験を記録する活動の意義と可能性 |
| 3. 学会等名<br>日本女性学会                |
| 4. 発表年<br>2019年                  |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>木下みゆき  |
| 2. 発表標題<br>災害時における男女共同参画センターの情報機能に関する一考察：阪神・淡路大震災から熊本地震までの連携・協力を中心に |
| 3. 学会等名<br>日本図書館研究会   |
| 4. 発表年<br>2019年   |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

|       | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)                          | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号)                          | 備考 |
|-------|--|--|----|
| 研究分担者 | 木下 みゆき<br><br>(KINOSHITA Miyuki)<br><br>(60791845) | 大阪大谷大学・文学部・教授<br><br><br><br>(34414)           |    |
| 研究協力者 | 森 未知<br><br>(MORI Michi)<br><br>(20415350)         | 独立行政法人国立女性教育会館・情報課・専門職員<br><br><br><br>(82403) |    |